

ずいそう

## 初秋の夢

アベル・ピソンボロ



今年の9月は流れ星のように、過ぎ去ってしまいました。そのせいか、地球温暖化で毎年耐え難いほどになっていた夏の暑さが少し減少したように思われます。

クールでさわやかな10月の風は、多くの忘れられない出来事を私たちの心に残して、「今年も終わりに近づいているなあ」と思わせてくれました。元日に雪が信じられないほど降ったこと、いつもより早めに桜の花が開いたこと、例年の梅雨の時期より遅く降り出した雨、あるいは日食の魅惑的な光景に続く悲惨な洪水のことなど、本当に、今年は気候の変化が顕著でした。

この「変化」は、また金融・住宅危機の問題から新しい指導体制の出現に至るまで、2009年に世界経済を揺るがした政治的、社会的なイベントの宣伝文句でもありました。自然と調和するような社会生活のシステムが世代から世代へと、確かに普遍的に受け継がれてきたのですが、このような変化によって、今人類は何かを見直さなければいけないのではないかと！歴史がそれを示しているように思われました。

私にとって、この10月は、特に印象深い季節です。故郷のコンゴ共和国ブーエンザ県の広大な平原で生まれ、魅惑的な熱帯雨林から大西洋の東海岸に至る大地で育ち、そして鉱物資源・ゴミ資源の処理という分野の研究をするため、ソ連と日本への長い旅の始まりとなったからです。これはたぶん不可能という限界を克服するために、多大な努力をしてきたことに対する政府からのご褒美だったかも知れません。

この夢は私の両親の夢でもありました。なぜなら地元小学校の教師が、好奇心旺盛で母の手に余るわんぱくな5歳の私が兄と学校に来ることを許可したのです。私の人生の中で、これは最も貴重な贈り物でした！

1884年のベルリン会議でアフリカの共有と分割のルールが認められた際と同じように、1989年にベルリンの壁の崩壊後、アフリカを襲った国家会議の波は、多くのアフリカ諸国に新憲法をもたらしました。同時に、いわゆる独立の後で築いた社会秩序を否定する条約が作成されました。この新しい変化の波は私達の夢が達成される絶好のチャンスでもありました。将来のために次世代に何かの足跡を残すこと、それが我々世代の役割であり、最も大きな喜びでした。そういう訳で、次世代への道を拓くため、東洋の神秘に魅了された私は、日本に向かい、1992年9月に九州に初めて上陸したのです。そして4年前、福岡から佐賀県武雄市に移動し、現在は(株)中山鉄工所に勤めています。

なぜ日本を選んだのか。

日本は海に囲まれた山がちな島国。乏しい鉱物資源、

火山噴火、地震、津波、台風などがあり、国の発展のためにいい気候条件や有利な地理的環境があるとは言えません。日本は他の多くの国と同じように、戦争を体験し、日本民族として一つの国になりました。しかし、戦後生まれた企業戦士のおかげで、世代から世代へ受け継がれてきたアイデンティティを守り、平和な文化との対話に基づいて争うことなく、政治的な問題と経済発展の間の微妙なバランスをととても大切にしてきました。戦後、高度経済成長を目指した国の中でフランスやドイツ等より日本の実例が最も魅力的だったのです。

初めて空港に到着した時、店員から「イラッシャイマセ！」と歓迎の挨拶！そこから日本での生活がスタートしました。

産業廃棄物（鉱山都市）の効率的な処理の研究、日本社会の国際化、子供達との国際交流、また途方もなく難しいものづくり技術とその芸術性や徒弟制度など、日本社会をより良く理解するには山あり谷ありのとても長い道のりでした。それは簡単なことではなかったけれど、大変だからこそ楽しかったのです。それで周りに「何かへんな外国人」とよく言われました。2006年のサッカーワールドカップ期間中に温泉で出逢った酪農家ユキノリさんもそう思ったかもしれません。

その不思議な出会いは強い信頼と友情の関係となり、無農薬の有機農業を始めるきっかけとなりました。高齢で農業ができなくなった両親の土地の一部を使用させてくれたのです。

有機農法に取り組んで得る喜びと環境は、武雄で暮らし始めて、確実に最も刺激的なものとなりました。

効率的なエネルギーの利用、廃棄物管理と自然環境保護、すべての生産活動が密接な関係にあります。そして、その仕事のやり方は実にダイナミックで、豊かなグループを形成し、お互い助け合いながら仲間と一緒にやっていくのです。それはまさに私の探求していた答えでもありました。

私はこの武雄の田舎で、よりバランスのとれた生活スタイルを保つために、温泉に加えて、定期的な合気道の稽古とジムでのトレーニングをしています。有機農法以上に良いエネルギー源は見つかりません。

今日も、「私の」有機野菜園（畑）の端からきれいな夕日を称賛しながら15年間、日本で歩いて来た道を振り返ると、いつの日かこの丘に家を建てて、新故郷と呼ぶことができるかも知れないと思うのです。